廃校の亡霊

noprops／原作
黒田研二／著
鈴羅木かりん／イラスト

PHP
ジュニアノベル

たけし
南部小学校の五年生。お調子ものの臆病。
でも、誰よりも友達思いのイイヤツ。
ひろし
北部小学校の五年生。小学生とは思えない、
洞察力と知識がある。謎解きが得意。
美香
東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、
いつも一緒にいる。運動神経バツグン。
卓郎
東部小学校の五年生。頭の回転が早く、
決断力と行動力がある。頼れる存在。

怪物

ブルーベリー色の巨人。
人間を見ると襲いかかってくる。
どうやって生まれたのか、
どこからやって来たのか、
すべてが謎に包まれている。
どうやら犬が苦手らしい……？

ジェイルハウス

タケルたちが怪物に遭遇した洋館。現在は卓郎の父親が管理していて、脱出ゲームの舞台にするべく工事が進められている。街外れにあるので、ふだんは誰も近づかない。タケルたちが脱出したあと、調査が行われたが、怪物の姿はなかったという。

タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。お父さんを助けるために、怪物と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解しているが、バレると面倒なので秘密にしている。

目次

1 犬も歩けば……　006
2 あの日の出来事　014
3 キャンプ場のひとだま　023
4 ハルナ先生　032
5 消えた子供たち　041
6 冒険の始まり　048
7 偶然の再会　057
8 だましあい　068
9 不気味な学校　079
10 消えたひろし君　085
11 冷たい地下牢　092

12 地下牢のパズル　105
13 地下牢からの脱出　114
14 怪物、ふたたび　125
15 怪物はどこだ？　134
16 音楽室の兄弟　144
17 給食室のパズル　154
18 図工室の攻防　163
19 二十年前の写真　172
20 怪物の正体　181
21 ありがとう、さようなら　191
ひろしによるなぞの解説　206

あらすじ

ある夏の日の夕暮れ、ぼく――タケルは、お調子もののたけし君、博識なひろし君、しっかりものの卓郎君、卓郎君の幼なじみの美香ちゃんたちといっしょに、街外れの洋館・ジェイルハウスに忍びこむことになったんだ。まさか、恐ろしい怪物がひそんでいるなんて知らずに……。

洋館に仕掛けられた「3つの謎」をなんとかクリアしたぼくたちは、怪物によって洋館の地下に捕らえられていたお父さんを助け、命からがら全員で脱出！　やっと日常に戻れると思ったんだけど……。

1 犬も歩けば……

痛いくらいの視線を背中に感じ、ぼくはもぞもぞとからだをよじった。

ちらりと目だけを動かして、視界のすみを確認する。芝の上にしゃがみこんだひろし君がじっとこちらを見つめていた。

その顔はまったくの無表情で、なにを考えているのかさっぱりわからない。

居心地が悪くなり、ぼくは逃げるように庭から移動した。開けっぱなしだった窓から室内にもどり、居間のソファへと跳び移る。

あきらめることなく、ひろし君もあとを追いかけてきた。ソファの前に座りこみ、今度はコンパクトカメラでぼくの写真をとり始める。

ソファはすぐにねむくなってしまうくらいふかふかだし、お父さんのにおいが染みついているからとても気に入っているのだけれど、シャッターの音が気になって全然落ち着けやしない。

しばらくひとりにしてもらえないかな？

そう口にしたが、ひろし君に通じた様子はなかった。

自分でいうのも照れくさいけれど、ひろし君はぼくのことが気になって仕方がないようだ。
もともとは、ぼくがビション・フリーゼというめずらしい犬種だったから近づいてきたのだろう。でも、先週起こったジェイルハウスでの一件以来、ひろし君はますますぼくに興味を示すようになった。ほぼ毎日、こうしてあきもしないでぼくを観察し続けている。
ぼくだってひろし君のことは大好きだ。ぼくの知らないことをいろいろと知っているし、ときどきおいしいお菓子をくれるし、なにより、いっしょにジェイルハウスの怪物と戦った仲間だ。
だけど、こうもべったりくっつかれると、さすがにうっとうしくもなるというものだ。
昨日も今日も朝八時前にやって来てから、ずっとこの調子。お父さんはひろし君のことを信頼しきっているらしく、玄関のカギを手渡してそそくさと仕事に出かけてしまった。
だから、ぼくはこの数時間、ずっとひろし君とふたりきりである。まったく……かんべんしてほしい。
「おや、雨が降ってきましたね」
ひろし君の言葉に、ぼくは顔を上げた。
今日は一日中晴天の予報だったから、外に洗たく物が干しっぱなしだ。
あわてて窓の外に目をやる。しかし、空は先ほどと変わらず青々としていた。

「だまされましたね」
中指の先でメガネのフレームを持ち上げながら、ひろし君はわずかにくちびるのはしを曲げた。たぶん、笑ったのだろう。彼の表情はとても読みとりにくい。
「怒らないでください。ちょっとした冗談ですから」
ひろし君が冗談なんていわないことはよく知っている。ぼくは小さくうなって、ひろし君をにらみつけた。
「やはり、僕の言葉がわかっているみたいですね」
メガネの奥のひとみがきらきらとかがやくのがわかった。
まずい。ぼくはぷいと横を向き、無視を決めこむことにした。
ひろし君のいうとおり、ぼくは人間の言葉を理解している。ぼく自身、最近まで気づかなかったのだが、ほかの犬たちはどうやらそうではないらしい。
ひろし君はカンのいい男の子だ。いつもいっしょにいるお父さんでさえ、ぼくにそんな能力があるなんて気づいている様子はない。
いや、ぼくがお父さんの言葉をほとんど理解していることはわかっているけれど、まさかここまでとは思っていないのだろう。今のところ、ぼくのこの力に気づいているのはひろし君だけで

ある。
それまでじりじりとぼくの全身に注がれていた視線が、不意に消えたのがわかった。
あれ？　ようやくあきらめてくれたのかな？
気づかれないようにさりげなく、ひろし君の様子を確認する。
ひろし君はじゅうたんの上に、カードを並べ始めた。お父さんの好きなトランプかと思ったがそうではない。
カードには桜の木の下でおだんごをほおばる女の子や、しかめっ面で薬を飲む男の子のイラストがえがかれている。右上にはひらがなが大きく一文字だけ記されていた。
「タケル君、これがなにかわかりますか？」
ひろし君がたずねてくる。ぼくは聞こえないふりをして、大きなあくびを続けて三回した。
「これはいろはかるたの絵札です。ここにえがかれたイラストはそれぞれあることわざを表しています。たとえばこの札――」
そういって、ひろし君は一枚のカードを拾い上げた。細長い棒にぶつかった犬の絵がえがかれている。
「〈犬も歩けば棒に当たる〉――じっとしていればよいものを、ついつい出しゃばったばかりに

思わぬ災難にあってしまう、という意味のことわざです」

ひろし君の言葉を聞いて、ぼくは不快感をあらわにした。

出しゃばったら痛い目にあう、という教訓はわからないではない。だけど、それがどうしてこ

のことわざになってしまうのだろう？　ぼくたち犬はただ歩いただけで出しゃばったことになってしまうのか？　なんだか納得がいかない。

「ああ……ごめんなさい。タケル君にとってはあまり面白くないことわざでしたね」

ぼくの心を読みとったのか、ひろし君はそのカードを引っこめながら頭を下げた。

口では謝っているものの、あまり申し訳なさそうな感じではない。じっとぼくの表情をうかがっている。

もしかしたら、ぼくが本当に人の言葉を理解するのか確かめるため、わざとそのカードを選んだのかもしれない。油断のならない男の子だ。

「タケル君。このかるたを使って、僕とコミュニケーションをとってもらえないでしょうか？」

ひろし君のまなざしがするどくなった。なにかをたくらんでいる目だ。ぼくは緊張して生つばをごくりとのみこんだ。

「僕の名前はひろしです」

ひろし君はそういうと、〈ひ〉〈ろ〉〈し〉――自分の名前を構成する文字が書かれたカードを、一音一音口に出しながら順番に持ち上げ、テーブルの上に置いていった。

「君の名前はタケル……た……け……る」

今度は〈た〉〈け〉〈る〉のカードをテーブルに並べる。
「では、僕の質問に答えてください」
ひろし君はせきばらいをひとつして、先を続けた。
「君のからだに生えている毛は何色ですか？」
ああ、なるほど。
ようやく、ひろし君の意図に気がつく。ぼくは人間の言葉を理解してはいるけれど、残念ながらそれをうまく発音することができない。だから、ぼくの意思を正確にみんなに伝えることはかなり困難だ。しかし、カードに書かれた文字を指差せば問題は解決する。
〈し〉〈ろ〉と順番に指し示せば、たぶんひろし君はメガネがずり落ちるくらいおどろき、そして喜ぶだろう。
ひろし君の期待にこたえることは簡単だ。ひろし君は文字の形と発音をぼくに教えるため、おたがいの名前をゆっくりと読みあげてくれた。でも、そんなことをしなくたって、ぼくはとっくにひらがなもカタカナも理解している。
昔、お母さんはぼくによく『どろんこハリー』という絵本を読み聞かせてくれた。
真っ黒によごれてしまって自分がだれなのか気づかれなくなってしまった犬が、おふろに入っ

てもとどおりになるというお話だ。シャンプーが大キライだったぼくをなんとかしたいと考えたお母さんの作戦だったのだろう。

おふろでピカピカになったハリーが本当に気持ちよさそうで、ぼくは何度もお母さんにこの本を読んでほしいとせがんだ。お母さんたちがいないときにはこっそり自分で本を開いて読みふけったこともある。結果、ぼくは文字を覚え、いつの間にかシャンプーも好きになっていた。

だから、ひろし君の質問に対して〈しろ〉と答えるくらいなんてことはない。なんなら〈じゅんぱく〉と回答することだってできる。

だけど、ぼくはあえてわからないふりをした。いつも冷静なひろし君が目を見開いておどろく顔も見てみたいけど、それだけではすまないような気がしたのだ。

悲しいことに、ぼくは犬。人間ではない。見た目もちがうし、言葉だって通じないから、たぶん本当の友達にはなれない。

犬も歩けば棒に当たる。

これは野生のカンみたいなもので、はっきりとした理由があるわけではなかったが、もし出しやばってぼくの能力がみんなにばれたら、今の幸せがあっけなくこわれてしまうような——そんな気がしてならなかった。

2 あの日の出来事

玄関のチャイムがくりかえし鳴りひびく。
訪問者はよほどあわてているのか、続けてドアを激しくノックする音まで聞こえてきた。
まるで音感ゼロのメンバーばかりを集めた楽団みたいだ。やかましくて仕方ない。
「……誰でしょう？」
鳴りやまないチャイムに、ひろし君はまゆをひそめた。
ひろし君はピンとこなかったみたいだが、思わず舌なめずりをしたくなるほどのおいしそうなにおいをかいで、ぼくは訪問者がだれであるかをすぐにさとった。彼のお昼ごはんはニンニクのたっぷり入ったチャーハンだったようだ。
テーブルの上に並んだ六枚のカードの中には、彼の名前のひらがなも混ざっている。
「どちら様ですか？」
テーブルと床に散らばったカードをひとつにまとめて右手に持つと、ひろし君はインターホンに向かって話しかけた。

「たたたたたたたけたけたけ……変だっ！」
日本語とは思えないへんてこな返事がもどってくる。
「変だ変だ変だよっ！」
「変なのはわかっています。どちら様でしょうか？」
「たけたけたけたけたけしです。たいへんたいへんたいへんたいへんなんだってば！」
「……大変？」
「きゃ、きゃきゃきゃきゃきゃんぷでふわふわふわふわぼぼぼぼんやりしたままままるいかかかたまりがふわふわふわあれあれあれはひひひひとひとひとひとだだだっ！」
インターホンごしではさっぱりわからない。ひとまず彼を落ち着かせなくては。
ぼくは窓から庭に出ると、素早く玄関口のほうへ回り、ドアの前であたふたし続ける男の子——たけし君の足にすり寄った。
「ひっ！」
たけし君を落ち着かせようと思ったのだが、どうやらそれは逆効果だったらしい。たけし君は青ざめた顔で五十センチほど飛び上がった。
「たたたたたたすけて！　幽霊だっ！」

足もとを見ればぼくだとわかるはずなのに、臆病なたけし君にはそれができなかった。泣きじゃくりながら、再び玄関のドアをどんどんとたたき始める。

ドアロックのはずれる音が聞こえた。ドアのすきまからひろし君が顔をのぞかせる。

「おわっ！」

たけし君は大声をあげ、その場に勢いよく尻もちをついた。グギッと腰のあたりからきみょうな音がひびく。

大丈夫？

心配になって、ぼくはたけし君の手の甲をぺろりとなめた。

「ひいっ！」

一体、どこからそんな声が出るのだろう？　電車の警笛みたいな音を鳴らして、たけし君は立ち上がった。勢いがつきすぎたのか、ひろし君が開けたドアに思いきり頭をぶつける。

今度はあまえる子猫みたいな声を出して、その場にうずくまった。たけし君はいつでもにぎやかだ。見ていてあきることがない。

「いろはかるたにたとえるなら、まさしくこの絵札ですね」

頭を抱えてうめくたけし君を見下ろしつつ、ひろし君は右手ににぎっていたカードの束の中か

ら一枚をとり出した。大泣きしている男の子に、ハチがおそいかかろうとしているイラストがえがかれている。

「まったく……おどかすなよ」

ようやく痛みがおさまったのか、たけし君がゆっくりと立ち上がった。

「なんでおまえがここにいるわけ？」

赤くなったおでこをさすりながら、ひろし君をにらみつける。

「どうしてくれるんだよ？　たんこぶができちまったぞ」

「それはすみません。……僕のせいでしょうか？」

「ああ、そうだ。こっちはオジサンが出てくると思ってるのに、いきなり青白い幽霊みたいな

顔がぬぼおっと現れたらびっくりするに決まってるだろ」
ひどいいわれようだが、ひろし君はまったくなんとも思っていないようだ。
「そういえば、いろはかるたには〈目の上のこぶ〉という札もありましたね」
とトンチンカンな答えを返す。
「で、オジサンはいないの？」
ひろし君の肩ごしに家の奥をのぞきこみ、たけし君はたずねた。
「仕事に出かけましたが」
「なんだよ。一大事だっていうのに、のんきに仕事なんてしてる場合じゃないだろ」
そういって舌打ちする。
「なにかあったのですか？」
「大変だ、ひろし。オレ、また見ちまったんだよ」
ひろし君のうでを強くつかみ、たけし君はおびえた表情をうかべた。
「また見た？　なにを？」
その問いかけに、たけし君ののどが小さく動く。つばをのみこんだのだろう。
「なにを見たのですか？」

なかなか答えようとしないたけし君に、ひろし君は同じ質問を投げかけた。
「……化け物だよ」
かすれた声でたけし君が答える。
「ジェイルハウスでオレたちをおそってきた青い化け物だ」
ジェイルハウスの青い化け物……。
その言葉を耳にしたとたん、全身の毛が逆立つのがわかった。しっぽが力なく垂れ下がる。
町の人たちからジェイルハウスと呼ばれている不気味な洋館。そこで青い肌を持つ巨人におそわれたのは、今からちょうど一週間前のことだ。
いびつな頭、顔の半分を埋めつくすほどの大きな目、するどい牙、異常なほどに盛り上がった筋肉……この世の生き物とは思えない異様な姿は、今思い出してもぞっとする。
幾度となく危険な目にあいながらも、ぼくたちは力を合わせ、ジェイルハウスからの脱出に成功した。あんな恐ろしい体験はもう二度としたくない。
「君はもしかして寝ぼけているのですか？」
ひろし君がたずねる。
「あのあと、建物の中をすみからすみまで調べてもらいましたが、結局なにも見つからなかった

でしょう？」

そう――ジェイルハウスから脱出したその日に、お父さんは卓郎君のお父さんに屋敷内で起こった出来事をもらすことなく電話で説明した。

卓郎君のお父さんは急きょ帰国し、警察官立ち会いのもとで屋敷中をくまなく調べ回ったが、ぼくたちをおそった巨大な生き物を発見することはできなかったらしい。

これまで空き家だった屋敷にすみついていた猿が、ぼくたちの出現におどろいて逃げていったのだろうと結論づけられ、捜索はあっけなく打ち切られた。

あれは絶対に猿なんかじゃない。お父さんもきっとそう思ったにちがいないが、身長二メートルを超える青い肌の怪物の存在なんて、だれも信じてくれるはずがなく、それ以上反論することはなかった。

「オレたちをつかまえそこねた化け物は、このままでは逆に自分がやられると思ったんだろうな。だから、青いひとだまになってジェイルハウスから逃げ出したんだ」

早口でたけし君が答える。

「ひろしだって見ただろ？　あの日、オレたちがジェイルハウスを脱出したあと、屋敷の上をふわふわと飛んでいった気味の悪いひとだまを」

ぼくはそのときのことを思い出した。
うす暗い地下通路を走りぬけ、ジェイルハウスの外へと逃げ出した直後――。
まるでぼくたちを祝福するみたいに、夜空にはたくさんの流れ星が飛んでいた。ペルセウス座流星群だとひろし君は教えてくれたが、それがどういうことなのか今もよくわかっていない。
流れ星に願いごとを三回唱えると、その願いはかなうらしい。ぼくは今一番望んでいることを流れ星に向かっていのった。
――ねえ。あれ、なに？
願いごとを三回つぶやいて、ほっとしているぼくの横で、美香ちゃんがふるえた声を出した。
美香ちゃんの視線はジェイルハウスの上空に向けられている。
青白い球体がぼんやりとした光を発しながら、宙にぷかぷかとうかんでいた。
遠くはなれていたのでよくわからなかったが、もし屋根のすぐ上に存在していたのなら、サッカーボールくらいの大きさだったのだろう。
最初は屋根の上に設置されたパラボラアンテナがどこかの照明を反射して光っているのかと思った。だけど、強い風が吹くと、それは風船みたいにふわふわとたよりなく移動を始めた。かと思えば、まるで意思を持っているかのように、上へ下へと一直線に動いたりもする。

風にあおられた風船がそんなふうに複雑に動くとは思えない。鳥のようにも見えなかった。

ぼくたちはおたがいにひとこともしゃべることなく、その球体の行方を目で追った。

光の玉は東の空へ向かってゆっくりと動き、そのまま見えなくなってしまった。

お父さんはUFOだったのかもしれないと首をひねり、たけし君はひとだまだ、幽霊だとさわいだが、ジェイルハウスをはなれてそれぞれの自宅にもどるころには、みんなそんなことはすっかり忘れてしまっていた。空飛ぶ球体よりも、屋敷で出会った怪物のほうが何百倍もショッキングだったからだ。

正直、ぼくもたけし君の話を聞くまで、あの日見た光の玉のことなんてすっかり忘れていた。

「……あのときの浮遊物体がどうかしましたか？」

ひろし君がたずねる。

「だから、何度も説明してるだろ。オレ、また同じものを見ちゃったんだ」

たけし君は目を大きく見開き、つばをあたりにまき散らしながらそう答えた。

3 キャンプ場のひとだま

たけし君は興奮すればするほど、話が長くなる傾向がある。

ゆうべたけし君が見たというひとだまの一件も、おとといっしょにクラスの友達から借りたマンガが面白すぎて夜更かししてしまったという話からなぜか始まり、本題に入るまで十分以上もかかった。

たけし君の話を一言一句そのまま伝えたら、それだけでこの物語が終わってしまいそうなので、ここは要点だけをまとめたほうがいいだろう。

昨日、たけし君は両親といっしょに一泊二日の家族旅行に出かけた。

行き先はぼくたちの住む町から二十キロほどはなれた場所にある山の中のキャンプ場だ。

昼間は川で泳いだり魚をつかまえたり、夜はカレーライスを作って食べ、河原で花火を楽しんだらしい。

夜中の二時ごろ、たけし君はテントの中で目を覚ました。遊び疲れて夕方三時間ほどねむりこんでしまったせいで、変な時間に目が覚めてしまったのだという。

もう一度ねむろうとしたが、目はますますさえていく。そのうち、トイレに行きたくなり、たけし君は両親に気づかれぬよう、そっとテントをぬけ出したそうだ。

満天の星に、たけし君は思わず感動のため息をもらした。ジェイルハウスで見た夜空もおどろくくらいキレイだったが、それとは比較にならないくらい星の数が多かったらしい。

キャンプ場には外灯が設置されている。もし、外灯のない場所へ行けば、今よりもっとすごい星空が見えるにちがいない。そう考えたたけし君はキャンプ場をはなれ、明かりのない山道へ足を踏み入れた。

すぐにあたりは真っ暗になった。のばした手の先も見えないくらいの闇が広がる。懐中電灯を持っていなかったら、たぶんまともに歩くこともできなかっただろう。

しばらく歩き続けたところで、たけし君は立ち止まった。空の低い位置で、青白い光の玉がふわふわとたよりなくただよっている。

先週、ジェイルハウスの上空を飛んでいた球体とまったく同じものだった。

一体、あれはなんだろう？

好奇心をおさえきれず、たけし君は光の玉を追いかけた。それは風に吹かれて飛んでいるかと思いきや、突然スピードを上げたり、虫みたいに素早く方向を変えたりしながら、最後には古ぼ

けた木造の建物の前で姿を消したそうだ。

「……なあ、あれってやっぱりあの化け物のタマシイかなにかだよな？」

ひととおり話し終えたところで、たけし君はひろし君のうでをつかみ、助けを求めるみたいに前後にゆすった。

「あいつはきっと、ひとだまに姿を変えて、あちこち動き回ることができるんだ」

たけし君の話にはいろいろとツッコミどころがあった。星のキレイな場所を求めて、外灯のない場所へひとりきりで出かけたとか、光の玉のあとを追いかけたとか、そのときのできごとを口にするだけでおびえた表情をうかべているたけし君に、そんな大胆な行動がとれたとは思えない。

ひろし君もそんなことにはとっくに気づいていたのだろうが、あえて指摘するようなことはなかった。それがやさしさというものだ。

「ひとだまなどという非科学的なものはこの世に存在しません」

メガネのフレームを指先で持ち上げ、ひろし君はいった。

「なにいってるんだ？　おまえだってジェイルハウスで見ただろ？」

たけし君がムキになって反論する。
「僕が目撃したのは青白く光る球体です。でも、それはタマシイなどと呼ばれるものではありません」
「じゃあ、なんだっていうんだよ？」
「ヤコウタケをご存知ですか？」
「ヤコウ……なんだって？」
「ヤコウタケ。自ら発光するめずらしいキノコです。あの夜はときどき強い風が吹いていました。もしかしたら、あのとき見たものは風に飛ばされたヤコウタケだったのかもしれません」
「……」
「ほかにも可能性は考えられます。ジェイルハウスのとなりは化学工場です。工場から可燃性の気体が漏れ出し、それに火がついたのかもしれません」
「わかった。百歩ゆずって、ジェイルハウスで見たひとだまの正体はそうだったとしよう。だけど、オレがキャンプ場で見たヤツはちがう。あれは青い化け物の変身した姿だ。ゆうべは風なんて吹いてなかったし、近くに化学工場もなかったんだからな」
「それについてもかんたんに説明できると思いますよ」

なんだそんなことかといわんばかりに、ひろし君はたんたんと答えた。
「……え？」
「先ほど、僕がこのドアを開けたとき、君は『助けて！　幽霊だ！』とさけびましたよね？　あれはどういうことだったのでしょう？」
「そうだ！　なんだか足もとが生暖かいなと思ったら、目の前に白いものが……」
「それが幽霊ですか？」
「きっとそうだよ！　キャンプ場からついてきちまったんだ！　どどどどうしよう？」
「君が幽霊だと思ったものが、後ろでしっぽをふってますけど」
そういってひろし君は、それまでたけし君の後ろでおとなしく座りこんでいたぼくを指差した。
ぼくのほうをふり返ったたけし君があんぐりと大きな口を開ける。

「え……タケル？」
どうも。おひさしぶりです。
ぼくはぺこりと頭を下げた。
「もしかしてあれ、タケルだったのか？」
はい、そのとおり。
「オレの手をなめたのも？」
はい。おどかしてゴメンなさい。
「こわいこわいと思っていると、なんでもないものまでこわく見えてしまうものです」
ひろし君はいった。
「キャンプ場でも、なにか別のものをひとだまと見まちがえただけなのではありませんか？」
「ばバ、バカにするなよ。オレ、全然こわがってなんていなかったし」
たけし君はつばを飛ばしながら大声をあげた。ムキになって否定する姿は、すべて事実でございますと認めてしまっているようなものだ。
「あれは絶対にひとだまだった。化学工場からもれ出したガスだとか、光るキノコだとか、そんなもんじゃない。大体、なんだよ？　ヤコウタケって。そんなもの今まで見たことも聞いたこと

もないぞ。……それ、食えるのか？　どんな形をしてるんだ？　大きさは？　味は？」
「見てみたいですか？」
「近くに生えてたりするのか？」
「いえ、残念ながらこの近くで見かけたことはありません」
「なんだよ。ないのかよ」
「だけど、写真なら見せられますよ。うちの学校の図書室に行けば、キノコばかりを集めた図鑑がありますし、子供たちが自由に使ってよいパソコンも置いてあります」
「見たい、見たい。今から行こうぜ」
なんだか話が変な方向に進み始めた。
だけど、ひろし君の興味がぼくからはなれてくれたのは素直にありがたい。訪ねてきてくれたたけし君にはひたすら感謝だ。
これでゆっくり昼寝ができる。大きなあくびをしながら、ソファにもどろうとしたそのときだ。
「おまえもいっしょに行くか？」
いきなり、たけし君がぼくを抱え上げた。

え……ぼくは今から昼寝を……。
首を横にふろうとしたが、
「おまえも光るキノコ、見てみたいだろ？　一体、どんな味なんだろうなあ？」
たけし君のうっとりした表情を見ていたら、なんだか急にお腹が空いてきた。
ふたりについていくことを決め、しっぽを左右にぶんぶんとふる。おまえは単純な性格だな、とお父さんによくいわれるが、残念ながら認めざるを得ない。
「よし、決まりだ」
たけし君はにっこり笑うと、ぼくを自転車のカゴに乗せた。少しきゅうくつだったが、底にクッションが敷いてあって乗り心地は悪くない。
「ちょっと待ってください。オジサンが心配するといけないのでメッセージを残しておきますから」
ひろし君は持っていたかるたを廊下のすみに置くと、足早に家の奥へともどっていった。
一番上にあった絵札が目に入る。
太い角を二本生やした青鬼の絵がえがかれていた。鬼はとげのついた金属の棒をにぎりしめている。

ジェイルハウスで遭遇した青い怪物のことをまた思い出してしまった。わずかに胸さわぎを覚える。でも、だからといって外出をとりやめようなどとは考えなかった。

まさか再び、あの怪物に出くわすことになるなんて……このときは夢にも思っていなかったのだから。